

# 『解体新書』 究理堂系書入れ本について

村松 洋

(元) 富士通研究所

受付：令和3年3月6日／受理：令和3年10月4日

**要旨：**1935年に古書店から購入した個人所有の『解体新書』（吉田本）と、類似した書込みがある『解体新書』合わせて16組を調査した。書入れは、小石元俊（1743-1808）が開設し、『解体新書』を教科書に使用したとされる京都の医学塾「究理堂」に関係するものである。インターネット上で公開されている46組の『解体新書』画像を使用して、吉田本と他の『解体新書』の刷りの前後関係を推定した。類似した書入れの筆写の状況を分析した結果、筆写された書入れが最初に書かれた時期は5期に分類できた。初期には漢書の引用が多いが、元俊が究理堂で講義をした時代には、図の中の符号の誤りが多数指摘されている等、解体新書が細部まで吟味されている。元俊の没後には、原書との突合せや他のオランダ語医書との突合せが増加した。すなわち「解体新書」への理解が長期間をかけて徐々に深まったことが認められた。興味深い書入れとして、臓器の寸法や重量を測定するために機器の必要性を指摘するものがあり、これは「解体新書」の記述を批判的に読んでいたことを示している。

**キーワード：**解体新書, 小石元俊, 究理堂, 書入れ, 吉田本

本稿を執筆することとなったのは、筆者の妻の実家が『解体新書』を保有していたためである。以下ではこれを「吉田本」と記す。吉田本には多量の書入れがある。吉田本および関連した書入れがある『解体新書』を調査したので、その結果を報告する。書入れへの考察の前提として、各蔵本の印刷時期の推定、移写の分析による書入れの時期の推定について説明し、その後に書入れの内容について考察を述べる。

## 1. 先行研究

『解体新書』は序図・巻之一～巻之四（以下1巻～4巻と略記）の全5冊から構成され、4巻末尾の刊記には安永3（1774）年と記されている。原書は『解剖学表』（Ontleedkundige Tafelen）である。『解体新書』を論じた文献は多数あるが、本稿と直接関係する書誌情報等についての文献のみを以下に示す。

松田泰代は刊記（板元須原屋市兵衛の住所が

「室町三町目」と「室町二町目」の2種がある。）と末尾の蔵版目録（書籍広告）について出版業の記録との照合等を行った<sup>1,2)</sup>。これにより、初期に刷られた本は「室町三町目」であること、「三町目」から「二町目」への移転は寛政2（1790）年であること、25組の『解体新書』のおおよその刷りの順序を示した。

ルカチ（Gabor Lukacs）は55組の『解体新書』を調査した<sup>3)</sup>。小石秀夫（1925-2009）が1984年に古書店から購入した組（以下「究理堂本」）の書入れを分析し、朱書は小石元俊（1743-1809）の書入れであり<sup>4)</sup>、究理堂本はかつて元俊の所有したものと判断した<sup>5)</sup>。元俊は、京都蘭医学の祖とされ、杉田玄白や大槻玄沢との交流があり、晩年に医学塾「究理堂」を開設した<sup>6,7)</sup>。小石秀夫はその後裔である。究理堂では『解体新書』は教科書の一つであった<sup>8)</sup>。ルカチは複数の組に究理堂本と共通する書入れがあることも指摘した<sup>9)</sup>。

大分県立先哲史料館は究理堂本の書入れを翻刻

し、同系統の書入れが香川大学と大分県立先哲史料館の蔵本にもあることを報告した<sup>10)</sup>。香川大本<sup>11)</sup>・横浜市大本<sup>12)</sup>・佐賀大本<sup>13)</sup>は多数の書入れがあることが報告されている。その他、複数の『解体新書』の組を検討したものとして日本歯科大本の報告がある<sup>14)</sup>。

## 2. 画像公開の現状と調査した『解体新書』蔵本

『解体新書』の所蔵の情報は図書館・博物館等で195組(内、海外29組)、個人所蔵と思われるものが40組検出できた。(個人所蔵の半数は数十年前の情報であり、現状の調査は困難であるが、一部は現在は図書館等に移管されていると思われる。)この内2021年7月時点では46組(内、海外4組)の画像がネットワーク上で公開されている。内15組は新日本古典籍総合データベース<sup>15)</sup>で公開されている。

本稿の主要な検討対象である吉田本は、奈良の古書店から購入された。吉田角次(1888-1966)の1935年5月の日記に、四書五経1点(21冊)と医書9点(37冊)の古典籍を購入し、その内の2冊が『解体新書』であることが記録されている。吉田角次は1916年に東京帝国大学を卒業、北海道の野付牛(現・北見市)で産婦人科医院を営んでいた。

吉田本では1~4巻は合冊されている。序図の表紙は本文とほぼ同じ紙で、題箋は無い。合冊された1~4巻には表紙は無く、1巻の最初の丁は欠如しており、吉田角次の蔵書印が2丁に捺されている。序図には書入れが皆無であるが、1~4巻には多数の書入れがある。寸法は、序図が26.4×17.6cm、1~4巻が26.3×17.4cmと、わずかな差があり、「序図」と「合冊ずみの1~4巻」の組合せは古書店の寄集めと判断できる。(以下「吉田本」等の記述は書入れのある巻のみを指す。)1巻の最初の丁の欠如は、吉田本を古書店に売却した人物が、正当な所有者を秘すために、蔵書印のあった丁を意図的に削除したものであろう。当時の正当な所有者は、その有用性を熟知していた筈であり、「破損しても補修しない」ことはあり得

ないからである。吉田本の書入れの例を図1に示す。なお図1の1巻3丁裏は、ルカチの著書に宛理堂本・ウェルカム図書館本(ロンドン)・テキサス大本の写真が掲載されており、対比が可能である<sup>16)</sup>。書入れには、「先生」の表現があるなど元俊の弟子が書いたと判断できるものと、元俊が書いた可能性が高いと判断できるものがあり、複数の筆跡が混在している。文献中の元俊の筆跡との対比も行ったが<sup>17)</sup>、筆跡から元俊のものとして以外を区別すること、および書入れを行った人数を推定することはできていない。元俊自身の書入れである可能性の高い部分(推定の理由は後述)を図2に示す。

本稿では表1に示す16組の書入れを検討する。内5組はネット上で画像が公開されている。一部は多量の書入れが以前から指摘されていたが、書入れの有無の情報なしに25組を調査した結果、内藤記念くすり博物館、横浜開港資料館、杏雨書屋、徳島県立文書館、歴史民俗博物館の5組の書入れを検出した。25組の内5組に書入れがあったことは、まだ多数の宛理堂系書入れ本が眠っていることを示唆している。以下では書入れの移写の状況を基に5種類に分類して、各組の概要を述べる。

分類(1)は、その書入れが多量に分類(2)~(4)に移写されている組である。宛理堂系書入れ本全体を樹木に例えれば幹に当たる。これ以外に書入れが多量に他に移写されている組は無い。

宛理堂本は前述のとおり、元俊の後裔である小石秀夫が購入した本であり、翻刻が出版されている<sup>18)</sup>。多数の筆跡が混在しており、ルカチはその数を6以上としている<sup>19)</sup>。ルカチは1~4巻の欄外の朱を元俊自身の書入れと推定したが、後述のとおり朱の部分には吉田本の書入れを移写したものが多量にある。ルカチの推定は、宛理堂本以外の組を十分に探索出来なかった等による誤解であろう<sup>20)</sup>。

分類(2)~(4)は、幹から出た枝と例えることができる。分類(2)は、宛理堂本と共通の書入れが多量にある組である。

中津市歴史博物館本<sup>21)</sup>は通常とは異なった構成となっている。通常は序図に吉雄耕牛の序・原

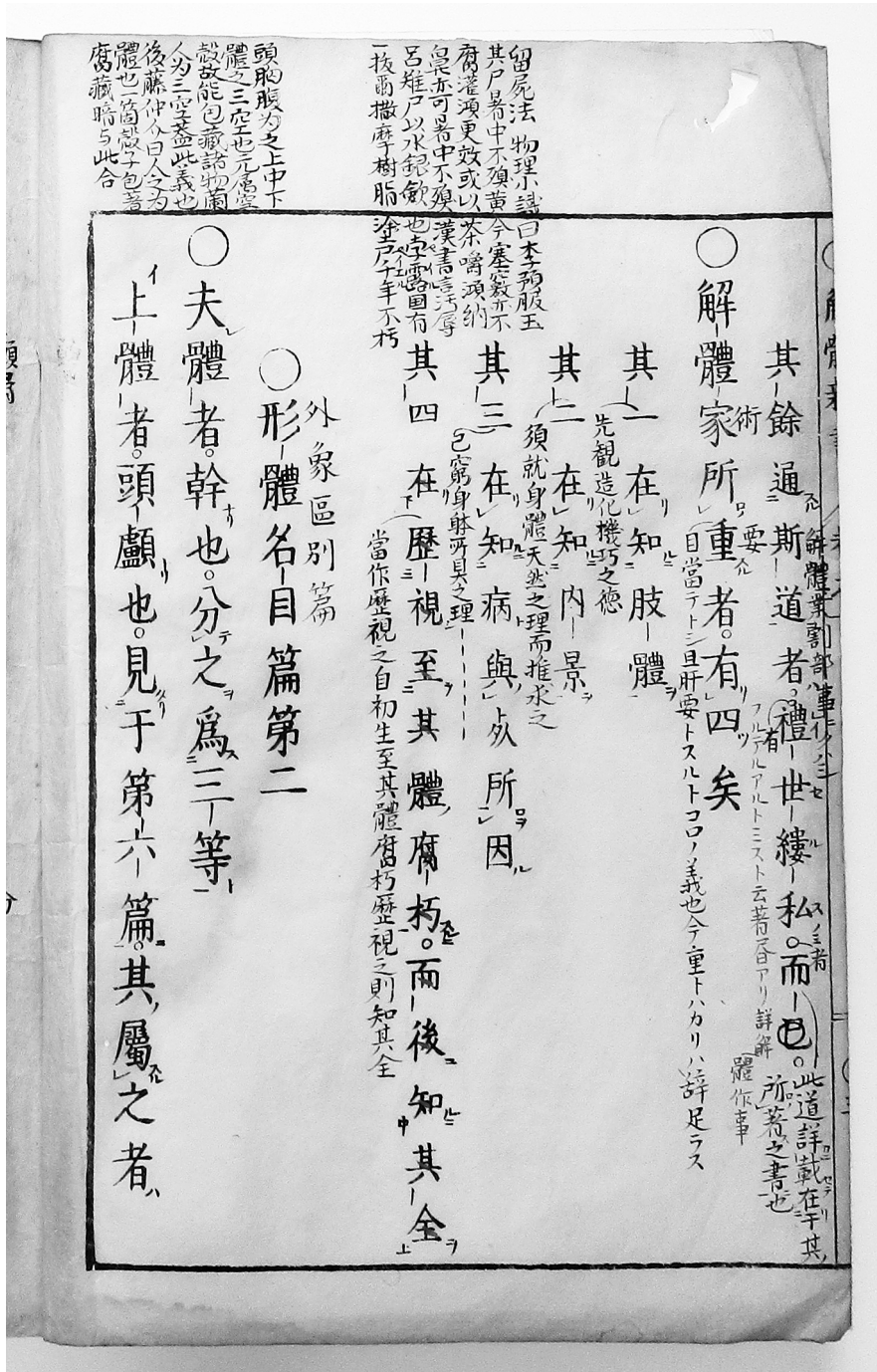


図1 吉田本の書入れの例 (1巻3丁裏)

1行目の左側の書入れは(フルテルアルトミスト……)は朱, 他の書入れは墨, 漢文・返り点つきの漢文・カナ混じり文の3種が混在。「外象區別篇」の字は, 筆跡が他とやや異なる。「書」の字体は右下と欄外では「書」であるが, 1行目左では「尺の下に日」と異なっている。欄外の『物理小識』の引用では, 「黄金」の字体は「黄今(冠の下にテ)」となっている。

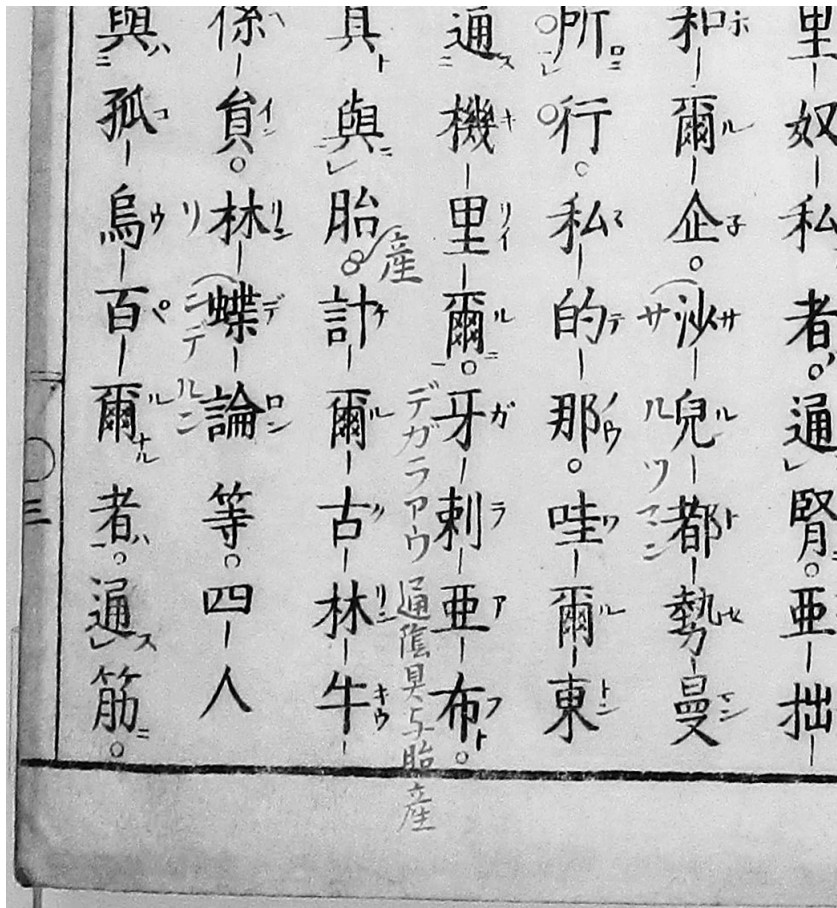


図2 吉田本 (1巻3丁表)

各行の左側(朱)が書入れ、行の右側のルビは刊本。

本の著者クルムスの自序・凡例・図が綴じられているが、中津市本の1冊目は、吉雄序・自序・凡例と1巻が綴じられ、図は無い。2巻から4巻は通常通りで、この他に通常と同じ序図が1冊ある。1冊目と「2~4巻・序図」の組合せは古書店による寄集めであろう。書入れは1冊目のみである。

内藤記念くすり博物館本(蔵書番号:30041)には『重訂解体新書』の引用が多数あり、一部にはオランダ語のスペル(1巻9丁裏)も書かれている。開港本や横市大本では、3、4巻では究理堂本と類似する書入れが少ないのに対し、内藤くすり本は全巻で究理堂本と共通する書入れが存在する。

神戸大学人間科学図書館(請求記号:491-0-14)は序図のみで、郷土資料の一部である。

横浜開港資料館本(請求コード:P.VI.12)は、

横浜生まれのアメリカ人ブルーム(P. Brum, 1898-1981)の蒐集した書籍である。

横浜市立大学医学情報センター本(鈴木文庫、請求記号490.9R/カ21)の1巻と序図の1丁には、「小田志村中村本」と書かれている。小田志村とは佐賀県武雄市西川登町大字小田志である。書入れが中村によると確認できる材料は無く、また小田志村には当時中村一族の複数の医師がいたが、書入れは中村涼庵(1809~1877)による可能性が高い。涼庵は、武雄における西洋医の開祖とされ、天保年間に種痘を行ったとの記録がある<sup>22,23)</sup>。これは、種痘の全国への普及の契機となった植林宗建(1802-1852)らによる佐賀藩主の子への接種(嘉永2(1849)年)<sup>24)</sup>の10年前である。(ただし涼庵の接種は牛痘種痘の原料である膿(または痲)

表1 究理堂系書入れ本の書入れ字数

分類	蔵本	序・自序・凡例	巻之一	巻之二	巻之三	巻之四	計	1~4 合冊
1	究理堂本	935	2,623	1,524	1,181	675	6,938	○
	吉田本	-	3,526	1,231	2,532	2,483		○
2	中津市歴史博物館本	933	1,382	-	-	-		×
	内藤くすり博物館本 30041	1,060	1,711	4,076	3,675	2,966	13,488	○
	神戸大(人間科学)本 491-0-14	982	-	-	-	-		-
	横浜開港資料館本	942	1,386	2,062	1,868	1,543	7,801	○
	横浜市大(医)本 490.9R/カ 21	738	4,489	5,096	3,556	1,627	15,506	○?
	杏雨書屋本 小 523	1,039	-	-	-	-		-
3	石川県立図書館本	532	3,118	1,484	1,863	1,962	8,959	×
	徳島県立文書館本	1,283	5,391	2,238	3,289	3,345	15,546	○
	佐賀大(地域学センター)本	698	3,819	1,345	3,166	2,267	11,295	○
	歴史民俗博物館本 H-160-7	-	-	3,302	-	3,065		×
	神奈川歯科大本	0	151	97	28	49	325	○
4	大分県立先哲史料館本 94-050	1,383	-	-	-	-		-
5	京都大本 7-05 カ 12	686	-	-	-	-		-
	香川大本	1,082	-	-	-	-		-

注) ハッチはネット上で画像が公開されている蔵本を示す。

「序・自序・凡例」の字数は「図」と表紙裏を含まない。「図」への書入れは本文の転記が多いため集計から除外した。究理堂本の「序図」表紙裏の書入れ(蘭学史)は430字、1巻表紙裏の書入れ(物理小識)は380字、徳島県本の1巻表紙裏の書入れは475字あるが、上記には含まれていない。

神奈川歯科大本の「序・自序・凡例」には書入れはないが、「図」には書入れがある。

表中の字数には、句読点と線を含まない。なお刊本(「図」を除く)の漢字は約24,000字である。

の海外からの入手経路が不明で、人痘接種の可能性が高いとされている<sup>25)</sup>。) 涼庵は文政6-10(1823-1827)年に京都で吉益北洲(1786-1857)に学び、武雄に戻った後に長崎でシーボルトの門下にも学んだとされる。ただし当時の京都の医学塾の現存する門人帳にはその名前を見出せない<sup>26,27)</sup>。

武田科学振興財団杏雨書屋本(管理番号:小523)は序図のみである。

分類(3)は、吉田本と共通の書入れが多量にある組である。

石川県立図書館本<sup>28)</sup>は、藤岡作太郎(1870-1910、国文学者)の蒐集した書籍である。

徳島県立文書館本は、徳島市の医家古川家の旧蔵書である<sup>29)</sup>。序図は劣化が厳しく、序・自序の巨郭より上の部分は、ほぼ欠損している。分類(2)~(5)の他の組は筆跡からは1~2名による書入れと推定されるが、徳島県本は多数の人が書入れている。

佐賀大学地域学歴史文化研究センター本<sup>30)</sup>は佐賀藩の医師の旧蔵したものである。

国立歴史民俗博物館本(資料番号H-160-7)は医を業としていた梶川家の蔵書で、2,4巻のみである。

神奈川歯科大本<sup>31)</sup>は、書入れは少量である。図には書入れ(刊本ではイ、ロ、ハ等の符号のみが部位に記されているが、書入れは本文を参照して部位の名称を転記したもの)が書かれているが、序・自序・凡例には書入れは皆無である。1巻2丁表のみ吉田本と共通する書入れがある。1~4巻の書入れ字数の約半分は漢字のルビで、医学上の書込みは少ない。

分類(4)の大分県立先哲史料館本(受入番号:94-050)は寄せ集めた組であり、多量の書入れがあるのは序図のみである。先哲本は、究理堂本と吉田本系の両方の書入れを引継いでいる。

分類(5)は、その書入れの一部が究理堂本へ移写されていると推定できる組である。樹木に例えれば根に相当する性格を持っていると考える。

京都大学付属図書館本(請求記号:7-05カ12)は序図のみである。クルムス自序の地名「タント

シフ」について、「ダンツシグ」の誤りであろうとの指摘等、地理関係の書入れに興味深いものがある。

香川大本は神原甚造(1884-1954, 法学者)の旧蔵書であり、序図のみである。神原は書入れは小石元俊によるものとの判断を記している。類似の書入れ本が多数存在することが知られていなかった時期の、「道按」(「道」は元俊の名)との書入れが2箇所にあることによる推定と考えられる。同一の書入れは石川県本と佐賀大本にも見られ、現時点では香川大本を元俊自筆とする根拠は見当たらない。

各巻のおおよその書入れ字数は表1のとおりである。序・自序・凡例では移写が多く、究理堂本・中津市本・開港本ではほぼ同じ字数である。独自の書入れと移写の関係は多様であり、例えば、開港本は1巻では大部分が移写であり、中津市本とはほぼ同じ字数であるが、開港本の4巻には移写は殆ど見られない。

表1に示すとおり、1~4巻が揃っている9組の内、7組で1~4巻は合冊されており、横浜市大本も表紙が補修されているが同様であった可能性が高い。究理堂では、多人数が利用した際の散逸や取り違えを防ぐために合冊が行われていたのであろう。

現物は未調査であるがルカチの書籍の写真を見ると、ロンドンのウェルカム図書館本には吉田本から、テキサス大本には究理堂本から引継いだ書入れがある<sup>32)</sup>。

この他、多量の書入れは東京医科歯科大、大阪大学適塾記念センター(目録番号: III-11-1)、杏雨書屋(管理番号: 杏3121)の蔵本にもあるが、究理堂系の書入れと直接関係する部分はない。

### 3. 刷の順序と印刷時期の推定

『解体新書』の刊記はすべて安永3(1774)年となっているが、嘉永元(1848)年にも板木の取引記録があり、長期間にわたって刷られた<sup>33)</sup>。画像より抽出した板木の劣化による印刷の欠損、および調査対象16組の欠損の状況を表2に示す。欠損は生じた順序により23のグループに分類でき

た<sup>34)</sup>。判り易い欠損の例は、表2のグループ8以降にある「図19丁裏左側の匡郭の欠け」(図3)と、グループ15以降にある「屏絵の左側の男性の臀部輪郭の点線化」(図4)である。

刊記が「室町三町目」の組は、欠損の分類からはグループ1~4に分かれた。グループ3は、松田による蔵版目録に着目した刷りの順序の推定の結果を利用すると6つのサブグループに分けることができる。グループ7までは欠損の発生は少ないが、グループ8以降は3, 4巻に多数の欠損がある。寛政2(1790)年から文化9(1812)年の間の時点で、板木の所有は京都・大阪に移っており<sup>35)</sup>、板木を江戸から関西へ運ぶ際に損傷した可能性が高い。

松田の推定結果<sup>36)</sup>を利用すると、究理堂本・石川県本・佐賀大本は安永7(1778)年6月から安永8(1779)年12月に刷られ、吉田本は寛政8(1796)年以降に刷られた本である。これに対し中津市本等は後年に刷られた。書入れの時期の検討では、これが前提となる。

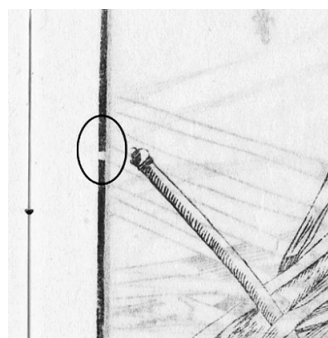


図3 図19丁裏の左側匡郭の欠損

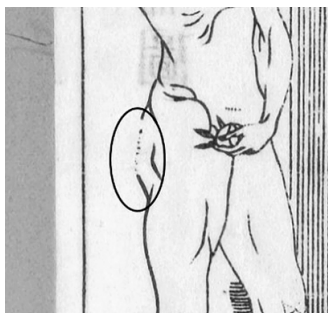


図4 屏絵男性の臀部輪郭の欠損

表2 印刷の順序と版木欠損

表の見方(例)「新規の印刷欠損」欄の欠損は、それより下の全ての行に存在する。例えばグループ8~23の本は、図19裏の匡郭左に欠損がある。サブグループは蔵版目録の差。1, 2……は刷りの順序であるが、A, B, ……は順序は不明。B1, B2は蔵版目録内の印刷欠損による印刷順序の推定。

グループ	サブ	所蔵図書館等	分類	刊記	蔵版目録	新規の印刷欠損(代表的なもの2件)		印刷時期
						件数	<1>	
1		杏雨書屋 乾 741	4	三町目	なし			安永3(1774)年以降
2		早大 ヲ 03 01060 東京医科歯科大	2 2M	三町目 三町目	4頁 4頁	2	3巻 4表 匡郭 右下 4巻 20表 匡郭 右下	安永4年12月~7年
3	1	名古屋大医	2	三町目	4頁	1	2巻 2表 匡郭 下左	安永4年12月~7年
	2	早大 ヲ 03 01366	2	三町目	4頁+5行			
	3	宛理堂 石川県立図書館	5 2M	三町目 三町目	4頁+6行 4頁+6行			安永7年6月~8年
	4	佐賀大 龍谷大	2 2	三町目 三町目	4頁+6行 4頁+6行			
	5	徳島県立文書館	4	三町目	4頁			
	6	神戸大 491-0-14 (序図)	2M					
4		神奈川歯科大 杏雨書屋 152	2 4	三町目 三町目	4頁 4頁-5欄	1	図 19表 匡郭 右	
	5	慶大 S@カ@68 大分県先哲 (序図)	2 4	二町目	なし	5	図 20裏 匡郭 下左 2巻 20裏 匡郭 下左	寛政2(1790)年以降
5	B1	九大江崎文庫(1-4巻)	2	二町目	8頁			寛政8(1796)年以降
	B2	印刷博物館	4	二町目	8頁			
	6	吉田(1-4巻) 内藤くすり記念館 30041 東大医 HR:91 福井県立図書館	3 3 2 2	二町目 二町目 二町目 二町目	なし なし なし なし	1	3巻 8裏 匡郭 左	
6	B	Nat. Lib. Med	2	二町目	須原屋伊八			(寛政6年以降)
7		東北大医	2	二町目	なし	3	4巻 16裏 匡郭 左下 4巻 19裏 匡郭 下左	欠損増加。版木を運搬?
8		豊橋市図書館	2	二町目	なし	30	図 19裏 匡郭 左	
		香川大(序図)	4					
		京大 7-05 カ 12 (序図)	3					
		歴博 H-160-7 (2, 4巻)	4	二町目	なし			
9		宮内庁図書寮 千葉大 45129~33	2 2M	二町目 二町目	なし なし	2	1巻 12裏 匡郭 左上 3巻 23裏 匡郭 左	
		阪大適塾 III-11-1	1M	二町目	なし	1	1巻 20裏 匡郭 上左	
11		Cornell University	2M	二町目	なし	1	図 5裏 「指骨」	
12		慶大 S@カ@6 東大 V11:902	2 1M	二町目 二町目	なし なし	1	2巻 3表 7行目 「焉」	
		阪大適塾 IV-1-8	1M	二町目	なし	1	凡例 2表 2行目 「乎」	
14		京大 富士川カ/311	1M	二町目	なし	2	図 1裏 「図」	図 20裏 匡郭 左
15		Staatsbibliothek zu Berlin	2M	二町目	なし	1	図 1表 扉絵 男の臀部	
16		横浜開港資料館	3	二町目	なし			
17		慶大 F-カ -12 (134巻)	2	二町目	なし	2	1巻 1表 匡郭 右	1巻 14表 匡郭 右
		横浜市大 医 490.9R/カ 21	4	二町目	なし			
		杏雨書屋 小 523 (序図)	4	二町目	なし			
18		UC Berkeley	1M	二町目	なし	7	序 5表 匡郭 右	4巻 22表 4行目 「腕」
19		東北大 491.63 (序図)	1M			1	図 5裏 匡郭 左	
20		東大 V11:901	1M	二町目	なし	4	巻1 3表 匡郭 右上	4巻 5裏 7行目 「七」
21		名古屋大(図)	1M			2	図 1裏 「體」	図 13裏 「図」
22		国会図書館 中津市歴博(序・1巻)	2 1M	二町目	なし	3	凡 4表 7行目 「加」	4巻 17表 匡郭 上
	23	A	神戸大 Yo-32	1M	二町目	なし	1	図 18表 「再」
23	B	長崎大経 武藤文庫	1	二町目	積書堂 2頁			文政8(1825)年以降

分類：1：新日本古典籍総合データベース 2：その他のwebページ 3：現物 4：複製・画像データ 5：翻刻本

M：1画面のサイズが1MB以上の高精細画像

ハッチ：宛理堂系書入れ本 約80組の蔵本を分類済みであるが、宛理堂系以外は代表的な蔵本のみを掲載した。

サブグループの一部は、蔵版目録の差による分類。松田泰代「蔵本目録の分析による刷年代識別法」参照

欠冊のある場合、グループを特定できないことがある。例えば大分県先哲資料館本は便宜的にグループ5に記入したがグループ5, 6のいずれかは判断できない。

## 4. 書入れ本間の移写の状況

### 4.1 分析手順

多量の書入れを分析するには、最初に着目する部分を絞り込む必要がある。このため4組(吉田本・究理堂本・中津市本・石川県本)の資料を入手した時点で、書入れの字数を欄外(巨郭の外)・行間・ルビに分けてページ毎に数え、各組の間の相関係数を算出した。その結果判ったことは、①欄外・行間・ルビによって相関係数が大きく異なり、行間については相関係数が小さい(すなわち、行間書入れは移写の占める割合が小さい)、②欄外については、吉田本と究理堂本の間が最も相関係数が大きいことであった。これを踏まえて、まず欄外書入れに着目して分析を行った。

### 4.2 欄外書入れの移写

以下では書入れを「項目」数で記述する。「項目」とは移写の単位であり、字数は多いものでは百字以上であり、短いものは1字のみである。

どちらが移写元であるかは、脱字や省略の状況から判定した。例えば、2巻7丁裏のホルトの木についての書入れを、吉田本・石川県本・究理堂本の間で較べると、吉田本・石川県本は5行あるのに対し、究理堂本は前半の3行のみであり、石川県本は2行目の1字が抜けている。これは、(他の未知の蔵本経由の可能性を考慮しなければ)吉田本に最初に書入れられ、究理堂本と石川県本は

それぞれ吉田本より移写したと判断できる<sup>37)</sup>。

主な組の1巻について集計した移写の状況は、図5のとおりである。究理堂本の朱書19項目の内18項目は吉田本からの移写である。究理堂本の墨書24項目の内、23項目は中津市本へ、22項目は開港本へと移写されている。吉田本からは、石川県本へ16項目、佐賀大本へ58項目が移写されている<sup>38)</sup>。

移写の順序は、まず「〈1〉究理堂本から中津市本・開港本」へ移写され、その後に「〈2〉吉田本から究理堂本」へ移写された。〈2〉の移写の後に新規の書入れが吉田本に加えられ、その後に「〈3〉吉田本から石川県本」へ移写された。吉田本に更に書入れが追加された後に「〈4〉佐賀大本」へ移写されたとの推定となる。(注：例えば〈2〉の吉田本から究理堂本への移写では、「この時点で吉田本への書入れはすべて行われていたが、特定の項目のみを選択して移写した」と仮定することも可能である。しかし、〈2〉の移写の時点では「若干移写されなかった項目もあるが、すでに書入れられていた項目の多くは移写された」と推定する方が、後述する様々な事項と整合的である。)

### 4.3 行間書入れの移写

欄外書入れのみの検討では、吉田本から究理堂本への移写は一回ですべてを移写したと考えてもよいが、行間書入れも調べると二回以上に分けて移写したことが判る。行間書入れでは吉田本か

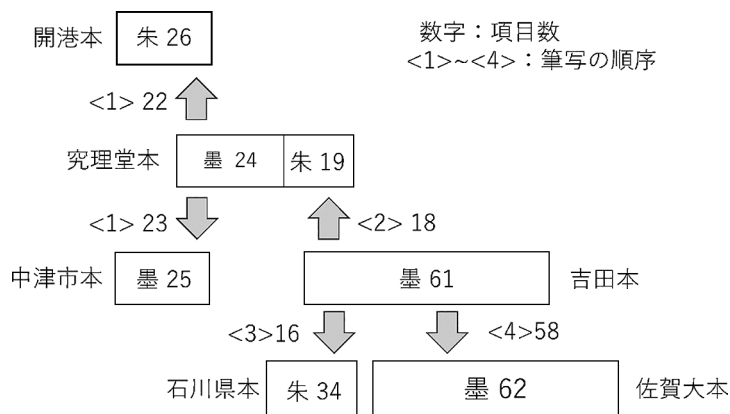


図5 1巻(1丁除く)の欄外書入れの移写項目数とその順序



ら、究理堂本の朱書の書入れを經由して、中津市本等に朱で移写された書入れが存在するからである。すなわち、以下の順序が推定できる。

- ・ 1回目の吉田本から究理堂本への移写：
 

この時点で吉田本には一部の行間書入れとルビのみが書き込まれていた。これが究理堂本の朱書へ移写され、更に、究理堂本から更に中津市本等へと移写された。
- ・ 2回目の吉田本から究理堂本への移写：
 

1回目の移写の後、吉田本には欄外書入れや行間書入れが追加されていた。この書入れも究理堂本の朱書へ移写されたが、究理堂本から更に中津市本等へは移写されなかった。

1回目に吉田本から究理堂本へ移写され、中津市本等へも伝播した行間書入れとルビの内容は以下の項目である。

- (1) 解剖に必要な道具の説明。原書では盤（解剖台）、大小の刀など13種が列挙されているが、『解体新書』では4番目の「かぎ鉤」が抜けており、書入れは「鉤」を挿入し、後続の番号を振りなおしている。
- (2) 主要な解剖学者名のリストのルビ。詳細は次節。
- (3) 解剖学者の専門分野の説明。『解体新書』の「(ウイルスとヒューセンは) 脳と心に詳しい」を「脳と神経に詳しい」(原文は漢文)と改めている。

以上はいずれも『解体新書』の翻訳の誤りを修正しており、原本と詳細な比較をしない限り書きえない内容である。これに対し、究理堂本から中津市本等へ移写されている書入れの内、吉田本からの移写でない書入れには、このような誤訳修正は存在しない。

#### 4.4 ルビの移写

ルビの形の書入れは、難しい漢字の読み(例：クサビ 織)の他に以下がある。

- ・ 解剖用語のオランダ語の発音(例：ロンゴ 肺)の追加
- ・ 人名に対する『解体新書』のルビの訂正

これらも原書を読むか、あるいは原書を読んだ人から教わらないと書けないものである。『解体新書』では人名は音訳され「ヘサリトス苛沙里都私」のようにルビが振られているが、書入れは例えば「ヘサリトス」を「ヘサリウス」と直している。吉田本から究理堂本等へ移写されている書入れは1巻2丁から3丁(図2)に登場する人名23名の読みを修正している<sup>39)</sup>。この修正には充分なオランダ語の知識が必要である。これが前節の(2)の内容であり、1回目に吉田本から究理堂本への移写されている。

小石元俊はオランダ語は学ばず、自からは『解体新書』の翻訳の誤りを修正できなかった。『解体新書』の訳の改善に多大な努力をしたのは、文政9(1826)年に『重訂解体新書』を出版した大槻玄沢(1757-1827)である。玄沢がいつ重訂の作業に着手したかは明確ではないが、天明8(1788)年12月の玄沢から元俊宛の書簡には「解体新書重訂も余程出来申候」とある<sup>40)</sup>。玄沢と元俊の間では文通もあったが、上記のルビの修正は文通で得るには量が多過ぎ、両者が面会して得た知識であろう。

#### 4.5 書入れ時期推定につながる書入れ

以上の他に書入れ時期の推定につながる書入れとして以下がある。

第1は究理堂本・他の1巻18丁裏の欄外に墨書されている「星野氏木図……」である。星野良悦(1754-1802)は寛政3(1791)年に解剖を行い、寛政5年に人体骨格の原寸大木製模型「身幹儀」を完成した<sup>41,42)</sup>。書入れは、『解体新書』の蔽骨(胸骨)についての記述と、「星野氏木図」の形状との関係を述べている。良悦は寛政11(1799)年1月に元俊を訪れて身幹儀を披露した。書入れはこの際の観察に基づき寛政11年に書かれたのであろう。

第2は「道按」の表現である。「按」は考えるの意、「道」は元俊の名であり、単純に考えれば、多くは元俊自身による書入れかその移写である。しかし本人のみが読むことを想定した書入れでは「道按」は不要であり、「道按」の書入れは他人が

読むことを意識している可能性が高い<sup>43)</sup>。究理堂本の朱書や吉田本には多数「道按」と書かれているが、中津市本等の究理堂本への初期の書入れを引継いだ組には見られない。元俊には少数の門人は早い時期から居たが、多数の教育を行ったのは享和元(1801)年の医学塾「究理堂」開設以降である。「道按」や「先生」の書入れは享和元年頃以降のものと考えられることができる。

第3は、香川大本に始まる書入れである。香川大本の書入れの一部は究理堂本や開港本等へと移写されている。その一つはクルムス自序の末尾の「和蘭開国来一千七百三十一年」に対する西暦の説明である。香川大本は、

行の右：「開国ハイタリヤノ天子開闢以来ヲ云  
イタリヤノ天子ハ欧羅巴ノ惣主也」

行の左：「和蘭開国ハ日本ノ人皇十一代垂仁天  
皇三十一年唐土ノ漢平帝元始二年ニ当  
ル也 天明七年マデ千七百八十七年也  
彼国年号ナン開国ヨリ何年トス 冬至  
ヨリ十二日ニ当ル日ヲ以テ正月トスル  
也」

欄外：「寛政戊午歳千七百九十八年也」(注：寛政戊午歳は寛政10年を指す)

と書かれている。この書入れは、究理堂本、さらに究理堂本を移写した本へと、微妙な変化を伴いながら移写されている。究理堂本、中津市本、内藤くすり本、神戸大本、先哲本では、欄外の「寛政……」の部分は無く、行間書入れの末尾に「今茲文化七年庚午千八百十年」が追加されている。開港本・横市大本・杏雨本では、「今茲文政二年己卯」となる。(なお、後述する徳島県本には、香川大本と同じ文があり、究理堂本を経由せず香川大本を移写したと推定できる。)

この書入れの主要部分「和蘭開国……正月トスル也」の出発点は、森島中良(1756?–1810)による『紅毛雑話』である。『紅毛雑話』は、毎年江戸へ参府するオランダ人から聞いた話を編集したもので<sup>44)</sup>、橋本宗吉が『喝蘭新訳地球全図』を執筆する際に参考とした書籍の一つとしても知られて

いる<sup>45)</sup>。オランダの開国と正月の説明の書入れは、若干の語句の差はあるものの『紅毛雑話』の冒頭の文とほぼ同じである<sup>46)</sup>。いずれも天明7(1787)年を説明しているが、『紅毛雑話』の刊記は同年の秋であり、大槻玄沢の序文は同年夏と記してある。

元俊は江戸への東遊を3回行っているが、初回は天明6~7年であり、玄沢宅に寄寓し、天明7年3月に帰途についた。表2のとおり、香川大本が刷られたのは初回の東遊より後の寛政6(1794)年以降であることも考慮すると、香川大への書入れに至る流れとして考えられるのは、以下の2点のいずれかである。

- (1) 寛政10年に『紅毛雑話』の刊本を見て、香川大本へ書入れた。(刊本を引用したのなら、『紅毛雑話』の名前が書入れられていないのは、やや不自然ではある。)
- (2) 天明7年に江戸で、元俊に同行した弟子の<sup>真</sup>狩元策が『紅毛雑話』の原稿を見て、何らかの紙に記入して持ち帰り、寛政10年に香川大本へ移写した。(元俊は天明8(1788)年の火災で書籍家財を焼失しており、元俊自身が持ち帰ったものである可能性は低い。真狩元策は寛政10年の施薬院での解剖に元俊と共に参加している<sup>47)</sup>。)

他の書入れの移写の状況も考慮して、香川大本からの移写の経路を推定すると図6となる<sup>48)</sup>。図6のXとYは、未見であるが存在したと推定する組である。Xに始まる一連の組は、究理堂の塾生の一人が移写した内容を、後輩の塾生や友人が移写を繰り返したものであろう。(注：未見の組を想定する理由は、例えば開港本と横市大本には共通するが、究理堂本にも中津市本にも無い書入れがあり、かつ開港本には横浜市大本と類似するが横浜市大本の移写ではない書入れが、横浜市大本には開港本と類似するが開港本からの移写ではない書入れが存在するためである。)

#### 4.6 移写の経緯についての仮説

以上を元俊の伝記と突き合わせると、以下のIからVIの仮説となる。この仮説は2021年3月まで

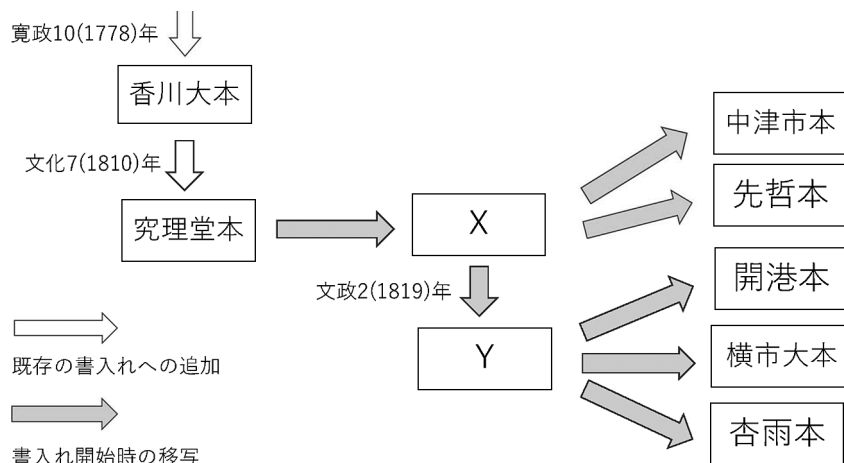


図6 初期究理堂本系の移写の状況

に入手できた11組の資料を基に導いたものであり、4.6節の以下の記述も3月時点のままである。

- I. 元俊の書入れの最も古いものは、究理堂本の墨書の部分である。元俊が『解体新書』を見て関心を持ったのは安永の末か天明の始め(1781年前後)とされる<sup>49)</sup>。天明6-7(1786-1787)年には江戸へ下り、玄沢宅に寓居して玄白とも交流したが、天明8(1788)年の京都大火で、「書籍家財とも残らず焼失」している<sup>50)</sup>。したがって、究理堂本の書入れは天明8年以降である。
- II. 寛政11(1799)年と寛政12(1800)年の東遊のどちらかで、玄沢の資料を移写するために、元俊は江戸で吉田本を入手し書入れを行った。元俊はこの東遊で『八刺精要』も筆写して持ち帰っている。『八刺精要』はヘイステル(L. Heister, 1683-1758)の外科書を玄沢が『瘍医新書』として翻訳したものの刺絡編である<sup>51)</sup>。
- III. 吉田本から究理堂本への1回目の移写の後、元俊とその弟子は吉田本への書入れを行った。この書入れは、元俊の没後に究理堂本へと移写された(吉田本から究理堂本への2回目の移写)。
- IV. 吉田本から究理堂本への2回目の移写の後にも、吉田本への書入れがあり、II, IIIの吉田本への書入れと併せて、石川県本へ移写された。
- V. その後も吉田本への書入れがあり、佐賀大本に移写された。(佐賀大本には少数だが香川大本よりの移写もある。)
- VI. さらに若干の書入れが吉田本へ行われ、これは移写されなかった。

以上の仮説は、調査した書入れを説明しうる最も単純な想定である。

#### 4.7 新たに調査できた書入れ本の内容と仮説

上記の仮説を整理した後新たに5組(内藤くすり本, 神戸大本, 徳島県本, 京都大本, 神歯大本)の画像を入手できた。以下では、この5組の内、徳島県本と神歯大本について、仮説と関係する事項を記述する。

徳島県本の1巻表紙裏の書入れを図7に示す。左から2行目に、記号の意味の説明がある。すなわち、▲は河野氏の書入れの写し、△は新校正、▽は小石江戸に於ける書入とある。1巻の書入れ

京都へ戻った後、江戸で吉田本へ書入れた内容は、究理堂本へ移写された(吉田本から究理堂本への1回目の移写)。

香川大本の西暦の説明等の書入れは、これより遅れ、元俊が没した2年後の文化7(1819)年に究理堂本へ移写された。この状態の究理堂本が、初期究理堂本系の諸本(表1分類2)に伝播した。

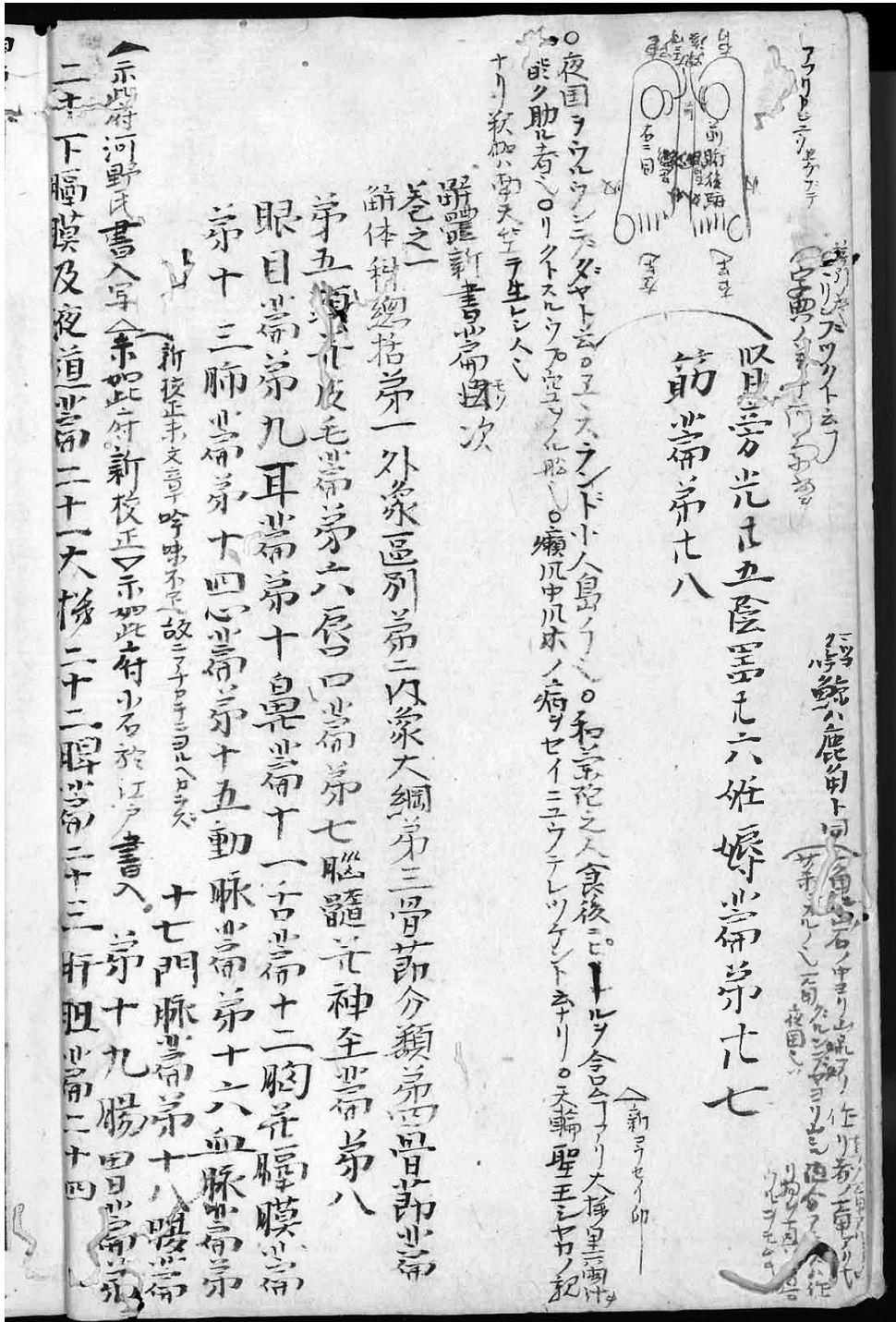


図7 徳島県立文書館本 1巻見返し

『解体新書』の目次を二人 (?) の人が書入れている。左側の目次は「篇一」から「篇二十四」、右側は「篇廿五」から「篇廿八」。▲△▽の説明が目次に囲まれている。

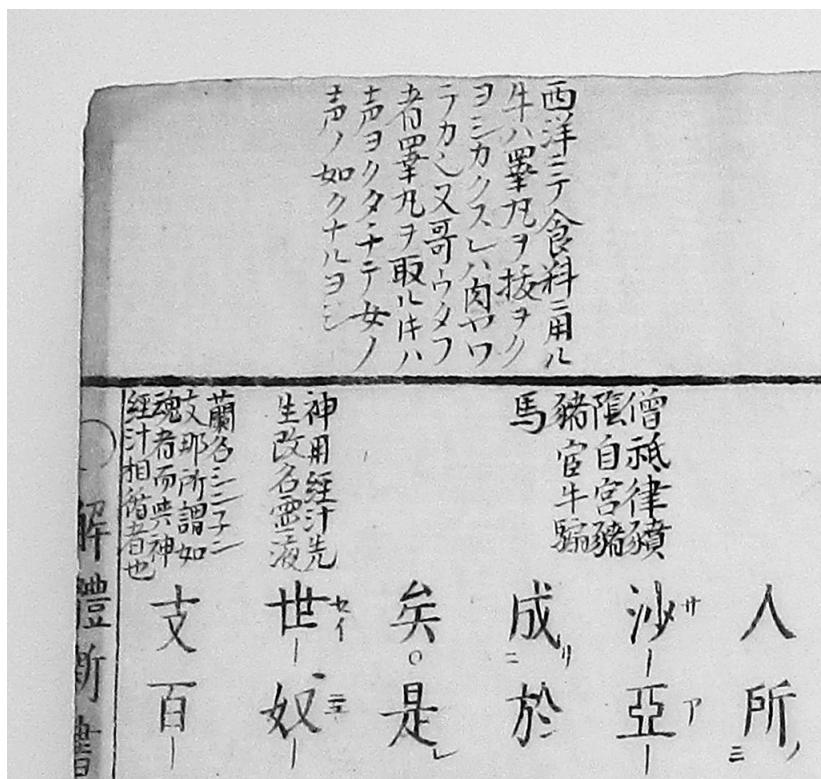


図8 吉田本書入れの筆跡と移写状況の關係の例(1巻11丁表)

この例では3種の筆跡が見られる。移写の状況の差から、異なった時期の書入れである。徳島県本と佐賀大本では、それぞれ前後の書入れと同じ筆跡である。

「僧祇……」：吉田本のみ。

「西洋……」：徳島県本・佐賀大と共通。徳島県本は▲付。

「神用経……」：宛理堂本・徳島県本・佐賀大本と共通。

「蘭名……」：石川県本・徳島県本・佐賀大本と共通

では、▲は4個、△は61個、▽は6個記されており、2巻には△が1個、3巻には▽が1個記されている。

▽の説明は、仮説として提起したとおり、元俊が江戸で書入れを行ったことを示している。江戸で書入れをした媒体が吉田本であるか否かは、慎重な検討が必要であるが、宛理堂系の諸本の書入れの一部が元俊の江戸への東遊に関係するものであるのは間違いはない。

▲を書いたのは河野氏となっているが、元俊の子である元瑞の門人帳には河野の名前は3人あり<sup>52)</sup>、誰であるかは特定できていない。▲のついた書入れは4項目の書入れは、いずれもカナ混じり文であり。吉田本・佐賀大本にも共通している。徳島県本と佐賀大本では前後の書入れと同じ

筆跡であるが、吉田本は図8の欄外書入れのとおり前後と異なる筆跡で書かれている。このため、吉田本は河野氏本人の書入れである可能性があり、他はその移写であろう。徳島県本の4項目の▲がついた書入れに対応する吉田本の書入れは、4項目で同じ筆跡である。

△のついた徳島県本の書入れは、多くが吉田本と佐賀大本と共通であり、石川県本には無い。文の細部を観察すると、徳島県本では△があり吉田本に脱字があるものが2件と、吉田本に△があるもの(△の意味を理解せずに機械的に写したと思われるもの)が1件あることから、△のついた書入れは徳島県本から吉田本へ移写された推定できる。この書入れでは徳島県本も吉田本とも「先生」が使われており、「道按」は登場しない。

▽のついた書入れの一例は1巻3丁裏(図1)の留屍法についての『物理小識』からの引用である。(『物理小識』については後述。)これと共通の書入れは、吉田本と宛理堂本にも存在するが、吉田本に江戸で書いたとは考えにくい<sup>53)</sup>。吉田本の書入れの中で江戸で書入れた可能性が最も大きいのは、II期の書入れであり1巻2~3丁の人名へのルビの修正(図2)であるが、この部分は徳島県本にも移写されているが、▽は付されていない。どれが江戸での書入れであるかは、元俊から弟子に口頭で伝えられたと思われるが、個別の▽の付与には誤りがある可能性もある。

徳島県本についての知見を整理すると、徳島県本には、吉田本から移写してきた書入れと、逆に吉田本へ移写した書入れが混在している。吉田本1巻の61項目の欄外書入れ(図5)に着目して、吉田本の書入れの中で、徳島県本からの移写の割合を概算すると、15~35%となる。この数字は、徳島県本と同様に吉田本へ移写された書入れ本が他にもある可能性を示唆している。

なお徳島県本4巻末尾の蔵版目録の余白には書入れがあり、『西説医範綱釈義』の書名と「文化二乙七月京寺町通勝村治右衛門……」と刊記を転記した発行年と版元が書入れてある。蔵版目録への書入れと本文への書入れが同時代のものであれば、徳島県本に始まる書入れは文化2(1805)年よりはやや後の時期に書かれたものとなる。

後から画像を入手し、仮説と関係の深いもう一つの組は、神歯大本である。この組には欄外の書入れは4項目しかないが、その内の一つが1巻2丁表の書入れである。吉田本・佐賀大本では「道按此他……」、徳島県本では「小石先生曰此他……」と書かれているが、神歯大本では人名なしに「此他……」で始まっている。これは、神歯大本の書入れをした人にとっては元俊の意見であることが自明であり、神歯大の書入れを吉田本へ移写する際に、「道按」を付けた可能性があることを示している。

以上が、新たに入手した画像の内容の内、仮説と関係する事項の概要である。仮説で直接的な根拠なしに移写の分析から想定したこと、すなわ

ち、江戸での吉田本への書入れと、吉田本の書入れの一部の「道按」等は他の組からの移写であろうとの想定は、徳島県本・神歯大本の内容と整合的である。江戸で元俊が書入れをした媒体が吉田本であるか否かについては、なお慎重に検討する必要があるが、「一部の書入れが江戸で寛政11~12(1799~1800)年に何らかの媒体に書き下された」ことは、事実であると言える。

新たに入手した画像が仮説と整合的であることは、(仮説は論理的には可能な様々な可能性を省略して簡潔な表現としているが)、仮説を導いた移写の分析等の手法が概ね妥当なものであることも示唆している。

## 5. 時期別の書入れの内容

### 5.1 第I期の書入れ

前節の移写の経緯についての仮説を前提とすると、移写されている項目が最初に書下された時期は、少数の例外を除き、仮説I~Vに対応してI期からV期に分類できる。

I期の書入れ、すなわち宛理堂本の欄外に墨書され<sup>54)</sup>、吉田本には対応するものが無く、中津市本や開港本等へ移写されている書入れの概要は以下のとおりである。

序(吉雄序・クルムス自序・凡例)への書入れの多くはI期のものである。吉雄序・クルムス自序には医学的な内容は無く、書入れは漢語(例えば「邯鄲の歩み」、「糟粕を信ず」)の出典やその原文の引用が主であり、西洋の地理についてのものもある。登場する漢籍は十数種にのぼり、儒教書(『礼記』、『詩経』等)、歴史書(『史記』、『左伝』)、仏教書(『六度集経』)と広い範囲に及んでいる。元俊は開業した後も、儒学の大家皆川淇園(1735-1807)の塾に入門するなどしており、その蓄積の反映であろう。宛理堂本の序への書入れの一部は、京都大本と香川大本にも類似するものがあるが、周知の語句の出典説明は独立して書いても類似の文となりえることから、移写かどうかは不明である。

1~4巻でも漢籍の登場は多い。『十四経』は5回登場し、『素問』(『黄帝内経』の一部)、『神相全

篇』も書かれている。『十四経（発揮）』は元代の鍼灸の書であるが、書入れは『解体新書』が記述する部位の『十四経』での名称を記している。元俊は晩年に繰り返し読むことを重視した医書を12点挙げているが、その中には鍼灸の書は無い<sup>55)</sup>。しかし享和元（1801）年に6丁からなる経穴の説明書『背部十対二十穴図』<sup>56)</sup>を書いている。また、自身への灸を生涯続けただけでなく、大坂では広く人に施し、大坂で灸をする者が増えたほどであったと記されている<sup>57)</sup>。『十四経』は元俊にとって身近な書であったのだろう。また『神相全篇』は人相学の書であるが、『神相全篇』での眼の呼称が「監察官」であることが引用されている。

オランダ語の書籍からの引用の一つは「日骨旬日」と書かれている。「日骨旬」とは、ドイツ語の『解剖学表』をオランダ語に翻訳したG. Dicten（1696?–1770）を指し、書入れは原書の中の注の形式で書かれている部分をDictenの文と誤解したものである。引用は原書の冒頭の「人体解剖と動物解剖との関係」の記述を約90字の漢文に要約している。

他のオランダ語書籍からの引用は「武郎日」で始まる2件である。これはブランカール（S. Blankaart, 1650–1704）の『新編解剖学』（Nieuw-Hervormde Anatomie）<sup>58)</sup>の3および5ページの翻訳である。この書は『解体新書』の「凡例」で『武蘭加兒解体書』として、参考とした書籍の一つとして挙げられている。引用は、「解剖では腹部より先に胸部を開いて血管を観察すべき」との記述と、解剖用具の説明であり、それぞれ約100字の漢文にまとめている。元俊はI期に先立つ天明3（1783）年に解剖を行って『平次郎臓図』を作っており、解剖の作業に直結する問題へ高い関心を持っていたことは明らかである。「日骨旬日」や「武郎日」として引用された文は、玄白や玄沢が訳した可能性や、元俊の弟子である斎藤方策（1771–1849）等が訳した可能性もある。ただし、玄白や方策はブランカールの音訳として「武蘭加兒」など、いずれも異なる表記をしており、「武郎」の表記をした人物は見当たらない。

登場する人名は、前述の「星野氏」の他に、「大

槻氏日」と「橋本氏日」がある。「大槻氏日」は、『解体新書』が意味不明のため音訳した「可都」の意味は「鶏距（けづめ）」であるとしている。「橋本氏日」は、香川大本から宛理堂本へと移写されたものである。京都大本にも類似した書入れがあり、京都大本では文頭の「橋本氏日」は書かれておらず、文にやや差があるため、香川大と京都大との関係は明確ではない<sup>59)</sup>。橋本とは元俊が寛政2（1790）年頃にオランダ語を学ぶために玄沢の下に送った橋本宗吉（1763–1836）である。宗吉は『囀蘭新訳地球全図』の翻訳もしており、海外の地理にも詳しく<sup>60)</sup>。宗吉の説として書かれているのは、クルムス自序にある丹都止夫とは正しくはダントシフ（Dantzich, 現グダニスク）との説明である。宗吉は『施薬院解男体臓図』では、図面にオランダ語で臓器名を書いており、真符元策と同様にこの解剖の際に元俊と接触があった。

「道按」や「先生」に始まる書入れはI期には存在しない。

## 5.2 第II, III期の書入れ

II期とIII期の書入れは、吉田本と宛理堂本に共通する書入れである。II期の書入れは中津市本や内藤くすり本等へ移写されている。III期は中津市本や内藤くすり本へ移写されておらず、II期より後に宛理堂本へ書入れたと考えられるものである。

前述のとおりII期の書入れには、解剖に必要な道具の説明の翻訳ミスの修正、主要な解剖学者のリストのルビの修正等があり、江戸で玄沢から得た知識であろう。『物理小識』からの引用はII, III期合わせて9件あり、内2件がII期である。『物理小識』が有用なことも江戸で得た情報かもしれない。加えて宛理堂本の1巻表紙裏に、『物理小識人身類小抄』と題した約380字の書入れがある。（この表紙裏の書入れは、他の組には移写されていない。）『物理小識』は明～清代の百科事典であり、著者は西洋人の耶蘇会士と交流があった方以智（1611–1671）、編集は子の中通（1634–1698）が行ったものである。『物理小識』はドイツ人湯若望（Adam Schall, 1592–1666）の書いた『主制群徴』の医学知識を取り込んでおり、西洋医学を取り込ん

だ最初の中国人著作とされる<sup>61)</sup>。玄白は『解体新書』の眼目篇や耳篇で「中通曰」等の形で倒立像や音の反射の説明のために引用しており、玄沢も『重訂解体新書』付録の中で『主制群徴』の部分を引用している。これに対して、究理堂系の書入れでは中国の伝統的な医学の記事、例えば屍体の防腐法や合血による親子関係の鑑定<sup>62)</sup>などを引用しており、玄白や玄沢の『物理小識』への着目点と、究理堂での着目点には差があると言える。

II期では「道按」と「先生」は各2件であるが、III期では「道按」17件、「先生」24件となる。吉田本ではIV期以降も含めると、「道按」は約60回、「先生」は約40回書かれており、III期の「道按」の書入れは、元俊本人の書入れの可能性はある。ただし、吉田本に多数書かれている「道按」に顕著な筆跡の差は見当たらず、元俊自筆と確認できるものは見当たらない。「道按」の内容は多様であり、元俊の考察を述べたもの、「道按物理小識曰……」等文献の引用、「道按〇〇当作□□」の表現で『解体新書』での〇〇の語句を□□と改訳するもの、誤訳の指摘、本文の各項目の符号と図の中の符号の不一致の指摘等がある。III期の「道按」では、図の符号の妥当性への疑問の指摘が8件と多い。訳文の修正では、通常読み方では気づきにくく、ゲラ刷りを校正するような読み方をしないと気づかない誤り(4巻22丁裏の表の中で6行目が誤って7行目と同じ「小指」となっている)が指摘されている。III期の「道按」の誤り指摘は、元俊自身が気づいた『解体新書』の誤りもあろうが、塾生に図と本文の対応関係等を網羅的に確認させた結果検出された誤りも含まれているように見える。

「先生」で始まる書入れの多くは『解体新書』の解剖用語に対する改名案である。例えば、『解体新書』の「神経」に対し「神用経」を提案している。吉田本の「先生」は、究理堂本への移写では「小石子」と変更されている。石川県本は「先生」のままだが、佐賀大本も「小石子」と変更されている。医学塾究理堂は元俊の没後には、元俊の子元瑞(1784-1849)に引き継がれたが、「先生」に換えて「小石子」を用いたのは尊称表現を用いて元

瑞との区別を明示するためかもしれない。

III期の書入れで引用されている書籍は『和蘭全軀内外分合図』である。この書はドイツ人レムメリン(J. Remmelin, 1583-1632)の解剖図のオランダ語訳を本木良意(1628-1697)が翻訳し、良意の死後75年の明和9(1772)年に出版されたものである<sup>63)</sup>。引用しているのは、『解体新書』での訳語「動脈」「血脈(静脈)」に対する良意の訳語である。

### 5.3 第IV, V期の書入れ

元俊没後のIV期とV期の書入れは、吉田本にはあるが究理堂本にはない書入れであり、石川県本に移写されているものがIV期、石川県本には無いが佐賀大本には移写されているのがV期である。徳島県本に書入れられ吉田本へ移写された書入れは、吉田本への書入れ時期としてはV期の一部であるが、最初に徳島県本に書かれたのはIV期以前の可能性がある。IV, V期がIII期までと大きく異なるのは、「本書」(「原書」の意)への言及や誤訳の指摘と、オランダ語の医書や西洋の解剖学者名への言及があることである。「本書」はIV期に13回登場する。例えば、胆嚢の説明が『解体新書』では「附肝之後」(肝の後につく)となっているのに対し、「本書肝下トアリ」とカナ混じり文で書入れている。これはオランダ語が読め、確かな解剖の知識を持った人物が書いたものであろう。「本書」への言及の多くは『解体新書』との差異の指摘であるが、精原脈(臍丸動静脈)の説明では、「本書ニモ同シク誤ルナリ」と原書自体の図の誤りも指摘している。この部分には「ヘスリンキユース曰ク」とあり、他の西洋の解剖書と比較も行った上で原書の誤りとしている。また「日骨旬註曰」として原書の注の中の顕微鏡への記述もV期に引用されている。

オランダ語の医書では、ヘスリンキユース(J. Vesling, 1598-1649)が4回登場する他、7名が登場する。

翻訳された解剖用語へのオランダ語の発音のルビ(例:横隔膜<sup>ミッテルリフト</sup>)の書入れもV期が最も多い、すなわち吉田本と佐賀大本に多いのが目立つ。



IV期とV期にも「道按」は多数登場し、訳文の変更案が多い。仮説ではこの時期は元俊の没後であり、元俊の生前に書かれていたものを移写して取り込んだか、生前の元俊の文に倣った文を弟子が書いたかであろう。前述のとおり、III期でも「道按」は塾生の指摘を追認した文である可能性があり、IV期以降もその形式を模したものかもしれない。(元俊没後の時期に多数の「道按」が書かれたとの推定はやや不自然であるが、宛理堂本の文化7年とある書入れが中津市本へ移写されていることを考慮すると、仮説とは異なる説明も難しい<sup>64)</sup>。)

中国の伝統への関心を示す書入れもあり、痛菓(松果体)について「道教が言う泥九宮に対応するのか」と記している。

IV期とV期では、カナ混じり文(オランダ語での臓器名や人名のカナ表記を除く)が増加している。

#### 5.4 移写されていない書入れ

特定の組にしかない書入れ、すなわち移写でない書入れの中で書籍の参照が最も多いのは開港本である。開港本では、『十四経』13回、『壺枢』5回、『神相全篇』3回が引用されている。『十四経』を多数引用しているのは、『黄帝内経』に由来する臓器の寸法等の記事であり、鍼灸とは直接の関係はない。ブランカールが開港本のみ書入れに4回、横市大本と共通する書入れに2回登場する。ブランカールの表記は「武郎」「武蘭」「蒲朗加兒都」と様々である。「蒲朗加兒都」との表記は斎藤方策による訳の引用であるが、他の表記は誰の訳か不明である。斎藤方策の『蒲朗加兒都解剖図説』の写本は、現在まで宛理堂に伝わっている<sup>65)</sup>。

歴博本にもブランカールは5回登場する。

内藤くすり本には、移写でないブランカールの引用は20件以上あり、「巴曰」としてパルヘインの引用も13件ある。また『重訂解体新書』(文政9(1826)年刊)の引用が青で多量に書かれており、書入れの約3割を占める。『生理則』(Plenck著、新宮涼庭訳)も引用されている。

佐賀大本は、3個所で原書と『解体新書』の相

違点を指摘し、原書の注釈部分の漢文訳も書かれている。佐賀大本に書入れをした者はオランダ語が理解できたのであろう。佐賀大本の1巻1丁裏には「重訂増訳曰」として『重訂解体新書』の文が7行引用されている。この文は『重訂』の刊本とは一致せず、草稿の写本を引用したものであろう<sup>66)</sup>。このことは、佐賀大本の書入れは、文政9年以前に行われた可能性が高いことを示唆している。

宛理堂本のみにある書入れでは17世紀の朝鮮で出版された『東医宝鑑』への言及がある。

人名で注目されるのは、元俊の子元瑞の名「龍」である。宛理堂本の舌の図には、「龍按……」の形式で原書を確認した書入れがある。これを移写したものは見当たらないことから、宛理堂本から中津市本や内藤くすり本への移写が行われた後の書入れであろう。歴博本では「耳篇」の喇叭管の説明に「龍按」として誤訳ではないかとの指摘、腎膀胱篇には、「小石龍按」として腎と小腎(副腎)の関係についての書入れがある。いずれも、『解体新書』への理解が深まっている印象の書入れである。

徳島県本には「凱曰」と2件書かれているが、これは荻野元凱(1737-1806)を指すのであろう。

#### 5.5 横浜市立大学本

横市大本は2節で述べたとおり、「小田志村 中村本」と所有者の名前が記されており、中村涼庵によって書入れがなされた可能性がある。表1のとおり書入れは多量である。序図以外では欄外書入れを全く移写せず、欄外を自らの書入れのために使用している。1~3巻の行間には開港本と共通の移写も見られるが4巻は殆どが独自の書入れである。

引用元が明示されていないが、引用と思われる書入れが欄外に多数ある。引用元が確認できた多量の書入れは以下の移写である。

- ・藤林普山訳『解屍篇』耳篇。『解体新書』の原書『解剖学表』の別訳<sup>67)</sup>。(写本のみ現存)横市大本にはa, b, cと原書の符号(『解屍篇』では省略されている)が書かれていることがか

ら、原書も見ながら移写した可能性もある。

・ブランカール『新編解剖学』斎藤方策訳『蒲朗加兒都解剖図説』<sup>68)</sup>(写本のみ現存)

・三谷公器(1755-1823)『解体発蒙』(文化10(1813)年刊)<sup>69)</sup>臓器の寸法や和名等を移写引用であることが示されており少量のものは、『産科発蒙』(寛政11(1799)年刊),『(万病)回春』,『物理小識』,『十四経』(2回)である。『生象止観』(文化12(1815)年刊)の著者野呂天然(1764-1834)も「野呂曰」として書かれている。西洋の人名とその説が書かれているのは「頭並皮毛篇」を中心に10名以上に上る。

『解体新書』の誤訳の修正は究理堂本から引き継いだ書入れがあるものの、横市大本独自の書入れでは訳の細部へのこだわりは感じられない。寛政期には、オランダ語を知らずに西洋の解剖学を学ぶには『解体新書』に頼るしかなかったが、中村涼庵が京都で学んだ時期(文政6-10(1823-1827)年)には、他に幾つかの書籍が流通しており、『解体新書』にこだわる必要が低下するのは当然である。

他の書籍からの引用を多量に行っているのは、『解体新書』の語句への注釈だけでなく、京都から故郷へ持ち帰るために、他の書籍の有用と思われる情報を『解体新書』という媒体に書き込んだためと考えることができる。

## 5.6 書入れ内容の経時変化のまとめ

推測を含むが、書入れの変化を解釈すると以下となる。

I期(寛政11(1799)年頃まで)の書入れでは、『解体新書』の文と中国医学の知見との対応関係を把握することに関心が向けられていた。『解体新書』を読んで生じた問題意識は、中国医学との関係に留まるものでなかったろうが、『解体新書』を穿鑿することでなく、自ら解剖を行うことに答えを求めたのであろう。『解体新書』を詳細に分析するには、オランダ語のスキルが必要であるが、I期にはこのスキルは無かった。

II期の寛政11~12年には、江戸で大槻玄沢から情報を得た。玄沢は『重訂解体新書』に向けた改

訳の作業を進めており、その情報は誤訳も多数ある『解体新書』を批判的に読むことの必要性を示唆するものであった。

III期には、医学塾究理堂で『解体新書』の講義が行われ、網羅的な吟味が行われた。図の符号の誤りなど『解体新書』のみを見て気づくことのできる問題点の洗い出しは進んだが、『解体新書』を超える知識には至っていないとも言える。

IV期以降は、原書との突合せや、他のオランダ語医書との突合せが行われるようになり、原書の誤りさえ指摘できるようになった。元俊が一部の弟子にオランダ語を学ばせた成果であろう。元俊が初めて『解体新書』を見てから、このレベルまで理解が進むには約30年を要した。

文政2(1819)年以降の書入れと推定される開港本では、ブランカールの参照も見られるが、依然として漢籍の参照も多い。オランダ医書への理解は進んだが、門人たちも中国医学から離れたわけではない。他方、横市大本のように漢籍への関心が低い例も登場する。

登場する日本人の人名や医書では、どの期も京都や大阪で活動した医師・医書が多く、江戸で活動した人物は大槻玄沢以外は見当たらず、江戸との情報交換は限られたものであったことが窺われる。

杉田玄白のオランダ医学と東洋医学に対する見方は「凡例」の中に明解に記されている。例えば「蘭書の分かりにくいところは十のうち七に過ぎない。だが中国の学説は、使えるものは十のうち一つあればよいほうである」(酒井シズ訳)と印象深い文がある。「凡例」のこの文やオランダ医学の評価に関する文への書入れは皆無である。このことから、究理堂ではオランダ医学をどう評価するかを正面から論ずることは無かったと考えざるを得ない。玄白が『蘭学事始』に記しているとおり、明和2(1765)年に『紅毛談』<sup>オランダばなし</sup>が発禁となったことから『解体新書』の出版は慎重に行わざるを得なかった。また寛政4(1792)年には林子平(1738-1793)の出版処罰が行われた。元俊は究理堂の門人が医書以外のオランダ書籍を読むことを厳しく禁じ、元瑞も父からの遺言によりこれを

守った。このような状況の下で、宛理堂では医学の個別の知識についてはオランダ医学を吸収したが、オランダ医学全体の評価は「幕府の忌諱に触れる議論に繋がるかもしれない」として正面からの議論を避けたのであろう。

## 6. 定量的観察に係わる書入れ

### ——京都と江戸，日本と西欧——

書入れの内容として興味深いものに、解剖で使用する計測器に関するものがある。『解体新書』では、「盤」(解剖台)に始まり「鑿」<sup>のみ</sup>まで解剖に必要な12種の道具が列記されている。これに対する宛理堂本の墨書の書入れは「先人曰く、此の佗尚備う可きは、大小の尺、大小の権<sup>はかり</sup>、大小の升と漏斗等」(原漢文)とある。中津市本、開港本、内藤くすり本も同文である。

吉田本・佐賀大本の書入れは「道按ずるに、此の外備う可きは四あり、一に曰く大小の尺、二に曰く大小の権、三に曰く大小の升、四に曰く滑稽」(原漢文)とある。神歯大本は先頭の「道按」がないが、それ以外は吉田本と同一である。徳島県本は、「小石先生曰」で始まり、「滑稽」に「ジョウゴのこと」と注記されている。石川県本には対応する書入れは無い。これらは、まずI期に宛理堂本へ「古人曰」が書入れられ、それとは独立にV期に神歯大本から吉田本へ「道按」の形で移写された(あるいは、吉田本へ書き下ろされた)ものであろう。末尾の「滑稽」は、辞書には「古代の流酒器」とある<sup>70</sup>。柚木太淳が寛政11(1799)年に著した『解体瑣言』の道具の説明にも酒器があり、「滑稽」は屍体を提供した霊を祭る儀式に用いたことが判る。滑稽以外は、長さ、重さ、容積の計測器である。

この度量衡の器具の必要性を指摘した文は、簡潔な表現ではあるが、クルムスの解体書での計測に対する鋭い批判とも読める。

『解体新書』では腸など8の臓器の長さ、大機里爾(脾臓)と脾臓の長さ・幅・厚さが記述されている。長さの単位は指横径、手など、6種類の表現が混在している<sup>71</sup>。長さの単位が多数用いれているのは、様々な原資料の数字を引用した結果で

あろうが、数値の比較を困難にしていることは言うまでもない。さらに、数値は1から20までで、ほぼ1桁の精度しかなく、目測でも判る程度の値しか記されていない。

これに対して、元俊が関係した解剖の記録を見ると、天明3(1784)年の『平次郎臓図』では、「肺重百三十九錢」などと臓器の重量や大きさを計測器で測定した値を記録しているだけでなく、胃、肝、脾臓の大きさの通常との差と、病気の影響の可能性に言及している<sup>72,73</sup>。この観察は「日本最初の病理解剖学的記載」と評価されている<sup>74</sup>。寛政10(1798)年の『施業院解男体臓図』でも同様に臓器の寸法と重さが記録されている。こうした計量は中国の古医書から引き継いだものである。中国最古の医学書とされる『黄帝内経』(および、それを再編した『難経』や『靈枢』、『十四経発揮』等)には、漢代に解剖して測定した臓器の大きさ、重量、内容量が記載され、「たった一回かぎりの(解剖の)試みに終わったが、その成果が忘れ去られることもなかった」とされる<sup>75</sup>。『黄帝内経』の記述は解剖に関心を持った当時の医師には周知であったであろう。日本で最初の解剖書である『臓志』(1759年刊)でも、背骨の長さは「尺有七寸九分」などが記録されている。

『平次郎臓図』や『臓志』を、クルムスの書と比較する上では、前者は個別の解剖の記録であるのに対し、後者は入門用の教科書であり個別の計量結果が登場しにくい一面はあろう。また解剖の場所は、前者は刑場近くの仮設の作業場であり、使用する器具等をすべて運び込む必要があったのに対し、後者は恒久的な施設内で行われ、日常的な備品は解剖用具として記載する必要が少なかったとも言える。しかし、『解体新書』で長さの単位が不統一なことや、数値がほぼ1桁に留まっている点からは、元俊の度量衡の器具の必要性の指摘は理にかなったものである。

元俊の計測器が必要との指摘に対しては多様な見方があるが、第一の視点は江戸の杉田玄白や大槻玄沢との対比であり、第二の視点は日本と西欧との対比である。

第一の視点では、西洋医学への姿勢に玄白と元

俊の差が見える。玄白は祖父の代からオランダ流の外科を家業としてきた<sup>76)</sup>。オランダの医学の優位を認め、中国を源流とする医学を「はなは菡莽(粗略)も甚だし(凡例6丁裏)として捨て去ることに躊躇はなかった。これに対し、古医方の影響下で学んだ元俊は中国医学を捨てずに西洋の解剖学にも批判的に向合っていると見える。先進国との差が大ききときに、先進国の文化の一部を迷わずに受け入れることは効率的であり、キャッチアップの速度を速めるが、批判的に向合うことが更なる発展のためには不可欠であることは言うまでもない。

大槻玄沢の『重訂解体新書』には、付録の末尾に『解剖学表』での長さ表現についての感想が書かれている。そこでは、『解剖学表』の長さの表現について「量尺を用いず」としており、「拇指横径」と玄白や玄沢が訳したオランダ語の *duimen* が、「親指」と「長さの単位」の二つの意味を持つことに気づいていない。*duimen* と訳されたドイツ語の原文 *Zoll* はインチに相当し、物差しで定義された公定尺であり、身体を使用して測る身体尺ではない。玄沢は人身を以って長さを測るのは東西共通であるとの感想を記している。西欧との共通点を見出して微笑しているかのような感想は、元俊の計測器の必要性を指摘する姿勢との間に大きな差を感じざるを得ない。

第二の視点で、定量的測定についての科学史での論考を振り返ると、クロスビー (A. Crosby, 1931–2018) は、西欧の科学が飛躍的に発展した要因として、13世紀から16世紀に天文学等の自然科学だけでなく、絵画(解剖図を含む)、手工業、商業等の広い分野で定性的な観察から定量的な測定への変化を指摘している<sup>77)</sup>。山本義隆も17世紀の物理学の発展の説明として、16世紀における絵画(解剖図や植物図を含む)、解剖学、鉱山、商業等での定量的な扱いの進展に伴って、定性的自然科学から実験と測定に依拠した定量的物理学への転換が行われたとしている<sup>78)</sup>。日本科学史学会の会長を務めた三枝博音(1892–1963)は、日本に自然科学の発達しなかった理由の二番目として、「計量観念に精密さを期することの少なかったこと、

計量に器械を使ってする精密さがなかった」ことを挙げている<sup>79,80)</sup>。こうした文脈からは、18世紀には西欧が定量的な観察では日本より先んじていたとの印象が不思議ではないが、これとは逆に、元俊は解剖に度量衡の器具が必要であると主張している。

また、クロスビーと山本が13–16世紀での西欧での定量的な把握の進展として、解剖図の写実化が、ダヴィンチ、デューラー、ミケランジェロ等の画家による人体計測の延長で生じたとしている(言い換えれば、解剖学者による定量化は顕著ではなかった)ことも見逃せない。16世紀の西欧での数量化の進展は事実かもしれないが、それが他の文化圏よりすべての面で優位であったとの思い込みは避けねばならない。

## 7. まとめ

究理堂系の書入れの移写を検討した結果、書入れを時系列に沿って分類することができ、『解体新書』の受容がどのように進化したのか把握できた。また、臓器の計測について、小石元俊が『解体新書』について興味深い批判的な見方をしていたことを明らかにできた。

## 謝辞

本稿の執筆中は新型コロナウイルス感染症対策として多数の施設で利用制限が行われていたが、多くの施設で資料の調査に特別の御配慮を頂いた。ここに謝意を表します。

## 参考文献および注

- 1) 松田泰代. 蔵版目録の分析による刷年代識別法: 書肆須原屋の蔵版目録を事例として. 書物・出版と社会変容 2010; 8: 69–95
- 2) 松田泰代. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『解体新書』. 杏雨 2010; 13: 228–253
- 3) Lukacs G. *Kaitai Shinsho—The single most famous Japanese book of medicine & Geka Sōden—An early very important manuscript on surgery*. Utrecht: HES & DE Graaf Publishers BV; 2008. なお本書については日本医史学雑誌 2010; 56(1): 101–102 にヴォルフガング・ミヒェルによる紹介記事がある。
- 4) Lukacs. 前掲3, p. 135

- 5) Lukacs. 前掲3, p.95
- 6) 山本四郎, 小石元俊. 東京: 吉川弘文館; 1967. 以降で元俊の伝記上の事項で注記が無い場合の出典は本書である.
- 7) 京都府医師会編. 京都の医学史(本篇・資料篇). 京都: 思文閣出版; 1980.
- 8) 有坂道子, 小石家と漢蘭折衷医学. 小石家文書研究会編. 宛理堂所蔵京都小石家来簡集. 京都: 思文閣出版; 2017. p.286-291
- 9) Lukacs. 前掲3, p.129,150-155
- 10) 大分県立先哲史料館編. 前野良沢資料集 第1巻. 大分: 大分県教育委員会; 2008. p.157-433
- 11) 松田清. 解説. 神原文庫洋学資料展: 啓蒙の源流. 高松: 香川大学附属図書館; 1995. p.5-6 <http://opac.lib.kagawa-u.ac.jp/www1/kambara/tenji/heisei7kanbara/shiryouten.pdf> (2020-04-10 参照)
- 12) 石原明. 解体新書出版後の利用. 日本医史学雑誌 1974; 20(3): 225-226
- 13) 青木歳幸. 江戸時代の医学一名医たちの300年. 東京: 吉川弘文館; 2012. p.290
- 14) 樋口輝雄, 中原泉. 『解体新書』緑版と黄版の書誌学的考察. 日本歯科医史学会々誌 2001; 24(2): 137-144 この論文で検討されている緑版は, 日本歯科大「医の博物館」に一時寄託されていた資料で, 現在は所蔵されていないとのことである. しかし緑版に掲載されていた積書堂の蔵版目録は長崎大経済学部武藤文庫の『解体新書』(画像は新日本古典籍データベースで公開)にも含まれており, 緑版の分析は武藤文庫本の検討に有用である.
- 15) 新日本古典籍総合データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/> (2021-06-27 参照)
- 16) Lukacs. 前掲3, p.146-153
- 17) 元俊の筆跡写真は, 山本. 前掲6. 口絵, p.27, 46, 115に掲載されている.
- 18) 本稿では宛理堂本は翻刻本を参照しており, 原書は未見である.
- 19) Luckacs. 前掲3, p.132
- 20) ルカチが元俊自筆と推定した宛理堂本の朱書の書入れには, 「小石子」の表現が28回登場する. 吉田本や石川県本にも対応する書入れが「先生」あるいは「小石子」として書かれている. 「子」は「孔子」等と同様の尊称表現と考えられ, 元俊自身の書入れとは考えられない. ルカチの判断は「道按」の文が多数の組にあることが知られていなかったため, 元俊自筆と理解したためであろう. 「道按」は7組に書かれている.
- 21) 中津市歴史博物館本画像(新日本古典籍データベース) <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100270081/viewer/1> (2021-6-28 参照)
- 22) 武雄市史(上); 1972. p.708-710
- 23) 石井良一. 武雄史. 非売品; 1956. p.593-597, 658-663
- 24) 青木歳幸. 佐賀藩の種痘. 青木歳幸, 大島明秀, W.ミヘル(編). 天然痘との闘い—九州の種痘. 東京: 岩田書店; 2018. p.124-147
- 25) 青木歳幸. 中村涼庵. 佐賀医学史研究会編. 佐賀医人伝. 佐賀: 佐賀新聞社; 2017. p.163-164
- 26) 医家門人帳. 京都の医学史資料篇. 前掲7, p.47-61, 229-412
- 27) 町村寿郎. 吉益家門人録. 日本医史学雑誌 2001; 47(1)~2002; 48(2)
- 28) 石川県立図書館本画像(李花亭文庫目次) <https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/toshokan/dglist/rikatei.html> (2021-6-28 参照)
- 29) 徳島県立文書館第6回所蔵資料紹介展—古川家文書から <https://archive.bunmori.tokushima.jp/tenjikai/91E6825589F18E9197BF8FD089EE9357.pdf> (2021-6-30 参照)
- 30) 佐賀大本画像 [http://www.chiikigaku.saga-u.ac.jp/gazou\\_db/kaitaishinsho.html](http://www.chiikigaku.saga-u.ac.jp/gazou_db/kaitaishinsho.html) (2021-6-28 参照)
- 31) 神歯大本画像 <http://www.kdu.ac.jp/library/digital/digital.html> (2021-6-28 参照)
- 32) Lukacs. 前掲3, p.153および151の1巻3丁裏の写真より推定.
- 33) 松田泰代. 『重訂解体新書』の出版に関する一つの考察. 書物・出版と社会変容 2007; 3: 95-110
- 34) 当時一回に版元から出す本は数十部とされる. 橋口侯之介. 和本入門. 東京: 平凡社; 2005. p.100
- 35) 松田. 前掲2, 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『解体新書』. p.235
- 36) 松田. 前掲1, 蔵版目録の分析による刷年代識別法.
- 37) 蔵本Aと蔵本Bの間で類似する書入れが多数あり, その内の複数の項目が「AからBへの移写」と推定できた場合, AとBの間で差がなく移写の方向を判断できない項目についても, ここでは「AからBへの移写」と見做して記述する. 移写についての記述を過度に煩雑にしないためである. 宛理堂系書入れ全体の構造を検討するのではなく, 個別の書入れについてどのように移写されたかを分析する際には, より厳密な検討が必要である.
- 38) 図では割愛したが, 石川県本には宛理堂本の朱の書入れを移写した可能性がある項目が3件ある. この種の例外的な移写は, 他の組の間でも存在するが, 各蔵本の位置づけに大きな影響を与えない場合は記述を省略している.
- 39) 酒井和子. 漢字による外国音の音訳法—『解体新書』と『重訂解体新書』. 東京国際大学論叢教養学部編 1994; 49: 69-77
- 40) 山本. 前掲6, p.120
- 41) 山本. 前掲6, p.155-157
- 42) 宮下三郎. 宛理堂の医書. 京都の医学史資料編. 前掲7. p.12-13, 21-22
- 43) 「道按」や「~先生曰」で始まる書入れと, 先頭の

- 部分の無い書入れの両方が存在する例が、宛理堂系書入れの中に少数だが存在する。どちらが移写元であるかは、機械的には判断できないが、これらの移写が生じる主な理由は以下によると考えられる。すなわち、本人が書入れたか、書入れをした人にとって誰の意見であるかは自明な場合に「氏名を特定しない書入れ」が行われることがある。これを他人が移写する際に氏名を特定する語句を追加する場合がある。この場合は、氏名を特定する語句の無い書入れが移写元である。また、「氏名を特定する書入れ」が行われてから、やや年月を経た後の移写で、移写を行った人には、氏名が示された人物に面識もなく、どのような人物かも知らない場合は、氏名を特定する部分を省略して移写することがありうる。この場合は、「氏名を特定する書入れ」が移写元である。
- 44) 杉本つとむ。解説。森島中良，大槻玄沢。紅毛雑話・蘭説弁惑(復刻)。東京：八坂書房；1972。p.233-235
- 45) 海野一隆。『喝蘭新訳地球全図』における参照資料。有坂隆道編。日本洋学史の研究 VII。大阪：創元社；1985。p.65-102
- 46) 『紅毛雑話』の西暦紀元の説明では、西暦紀元は垂仁天皇31年となっており、香川大も同様だが、宛理堂本では32年となり、杏雨書屋本と横浜市大本では30年と変わる。正しくは30年である。
- 47) 山本四郎。前掲6，p.146
- 48) 図6では、神戸大本と内藤くすり本は割愛した。神戸大本は序図のみのため、Xを経由しているか否か判断できない。内藤くすり本は、開港本と共通する書入れが多く、これを説明するには、更に複雑な移写を想定する必要があるためである。
- 49) 大槻玄沢。大愚先生遺事。京都の医学史資料編。前掲7，p.103
- 50) 小石元瑞。先考大愚先生行状。京都の医学史資料編。前掲7，p.89
- 51) 山形敏一。佐々木中沢と刺絡。日本医史学雑誌1978；24(3)：214-223
- 52) 櫻園先生門籍。京都の医学史資料篇。前掲7，p.47-61
- 53) 留屍法の書入れの引用元は『物理小識』(国会図書館本，巻之三，24丁裏)である。吉田本では「黄金」の書体が図1のとおり「黄今」(厳密には「今」ではなく、冠の下に「テ」となっているが、『物理小識』・宛理堂本(ルカチ，前掲3，p.147)・徳島県本・佐賀大本では「黄金」の書体である。元俊自筆とされる文書『西游再功』の最初のページ(山本『小石元俊』p.27)には草の名称として「黄芩」の字が書かれている。このことは、吉田本の該当する書入れが元俊自筆の可能性を示唆している。
- 石川県本には移写されていないことから、吉田本から石川県本への移写が行われた後に吉田本へ書入れられ、宛理堂本にも移写されたとの推定になる。(4.3節では、吉田本から宛理堂本への移写は2回であるが、3回に分けて行ったと推定。)留屍法の書入れ自体には移写の際の誤字は存在しないが、同時期に書かれたと思われる4巻の『物理小識』を引用する書入れ(吉田本・宛理堂本には存在するが、中津本・石川県本には存在しない書入れ)は、省略の状況から吉田本から宛理堂本への移写と推定できる。
- 54) 本稿での推定では、宛理堂本の墨の欄外書入れはI期のもとの、III期以降のもとの両方があり、前者は元俊による書入れの可能性が高いとしている。ただし、翻刻本のみを参照しており宛理堂本の原本は参照していない。ルカチは原本を参照した上で、墨書は元俊によるものではないと判断している。
- 55) 小石元瑞。先考大愚先生行状。京都の医学史資料編。前掲7，p.99
- 56) 背部十対二十六穴(早稲田大学古典籍総合データベース) [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09\\_00483/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00483/index.html) (2020-11-13参照)
- 57) 小石元瑞。先考大愚先生行状。京都の医学史資料編。前掲7，p.89
- 58) ブランカール。新編解剖学。 <https://catalog.hathitrust.org/Record/100240372> (2021-7-12参照)
- 59) 橋本宗吉の筆跡は、中野操。大坂蘭学史話。京都：思文閣出版；1979。p.47。京都大本書入れの筆跡とは異なっている。京都大本は地理に関係する書入れが多く、橋本の門人による書入れの可能性もある。
- 60) 中野操。大坂蘭学史話。京都：思文閣出版；1979。p.39-74
- 61) 陶恵寧。『重訂解体新書』所引の中国書籍の研究。日本医史学雑誌2002；48(2)：155-174
- 62) 合血についての解説は以下。高田義一。趣味の医学夜話。東京：至文社；1929。p.214-227
- 63) 小川鼎三。明治前日本解剖学史。日本学士院編。明治前日本医学史第一巻。東京：日本学術振興会；1955。p.131
- 64) 元瑞は、父が執筆したが火災により失われた『元衍』の遺存する部分の収集に努めたことが知られている。(末中哲夫。『学医要論』。実学史研究 VII。京都：思文閣出版；1991。p.303-315) 元瑞が意識的に父の講義に基づくの書入れも収集した可能性もあり、これがIV期とV期にも「道按」が多数登場する理由かもしれない。
- 65) 宛理堂図書目録。京都の医学史資料篇。前掲7，p.175
- 66) 『重訂解体新書』の草稿とされるのは早稲田大学の蔵本 [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_a0028/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_a0028/index.html) (2021-3-5参照)であるが、1巻を欠いているため、佐賀大本の引用と対比することはできない。
- 67) 解屍篇 <http://hdl.handle.net/2324/1000756698> (2021-

- 07-12 参照)
- 68) 蒲朗加兒都解剖図説 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100269370/viewer/1> (2021-07-12 参照)
- 69) 解体発蒙 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100315311/viewer> (2021-07-12 参照)
- 70) 漢語大詞典. 上海：漢語大詞典出版社；1997
- 71) 『解体新書』での長さの記述には誤訳もあり，ここではドイツ語版で内容を確認する．登場する表現は，指 (quehr Finger), 拇指 (Zoll), 手 (handbreit), 距 (指を開いたときの親指と小指の距離, Spanne), 腕 (肩から手首, Elle), 体幹 (der groß Körper) である．ドイツの地域毎の度量衡を詳述している J. Gyllenbok. *Encyclopaedia of Historical Metrology, Weights, and Measures*. Switzerland: Birkhäuser; 2018. p. 1230–1231 によれば，原書が 1732 年にダンツィヒで書かれたとき，プロイセンで使用されていた公定尺は上記の内の Zoll と Elle だけである．Zoll はインチに相当し，ドイツ語では「親指」の意味は無い．『解体新書』の「拇指」はオランダ語の duimen を訳したものであり，duimen には「親指」と「インチ」の両方の意味があるため，重訳に伴う誤訳である．腸の長さの説明に用いられた「体幹」は，公定尺としては使われた例は見当たらず，
- 十二指腸の長さを「指十二横径」としたのは，ギリシャ時代から引継がれた表現であり，身体尺（身体を基準とした長さ）である．それ以外の表現は，地域によっては公定尺に用いられた時期があり，身体尺か公定尺かは断定し難い．
- 72) 京都の医学史（本篇）. 前掲 7, p. 984
- 73) 小石元俊, 橘南谿. 平次郎臓図（復刻）. 東京：大塚巧芸社；1973
- 74) 中野操. 小石元俊の医学上の功績について. 日本医事新報 1958；1809: 55–60
- 75) 山田慶兒. 中国医学の起源. 東京：岩波書店；1999（第 7 章 計量解剖学と人体計測の思想）p. 325–380
- 76) 片桐一男, 杉田玄白. 東京：吉川弘文館, 1971. p. 4
- 77) A. W. クロスビー著. 小沢千重子訳. 数量化革命. 東京：紀伊国屋書店；2003
- 78) 山本義隆. 十六世紀文化革命. 東京：みすず書房；2007
- 79) 三枝博音. 梅園哲学入門. 三枝博音著作集第 5 巻. 東京：中央公論社；1972. p. 199–202
- 80) 三枝博音. 科学的であることと日本人. 教育 1958；87: 26–34

## Manuscript Annotations in the *Kaitai Shinsho* at Kyurido School

Hiroshi MURAMATSU

(Former) Fujitsu Laboratories Ltd.

In this paper, 16 sets of *Kaitai Shinsho* related to Kyurido were investigated. Kyurido was a private medical school in Kyōto, established by Genshun Koishi (1743–1808). In his classes, he used *Kaitai Shinsho* as a textbook. The 16 sets also include a copy acquired from a second-hand bookstore in 1935 by Yoshida. There are many copied manuscript annotations in the 16 sets. The printing time of 16 sets was estimated by comparing with images of 46 sets of *Kaitai Shinsho* which were accessible online. As a result of analyzing the details of annotation copying, the time when annotations were first written down could be classified into five distinct periods. In the earliest period, many Chinese books were quoted, but in the period when Genshun gave lectures at Kyurido, many errors in the signs in figures were pointed out, and *Kaitai Shinsho* were examined in detail. After Genshun's death, the number of references and citations to the original Dutch book of *Kaitai Shinsho* and other Dutch medical books increased. In other words, it is recognized that the understanding of *Kaitai Shinsho* in Kyurido gradually deepened over a long period of time. An interesting annotation is that it points out the need for tools to measure organ size and weight, which indicates that Genshun was reading *Kaitai Shinsho* critically.

**Key words:** *Kaitai Shinsho*, Koishi Genshun, Kyurido, annotation, Yoshida copy